

アカデミックライティングにおける 日本人英語学習者の 頻度を表す副詞の使用について

藤本 和子

1. アカデミックライティングにおいて、ヘッジ、ブースターと呼ばれる言語表現は、書き手が主張に対して、可能性や確信の度合いについて述べるのに重要な働きをする。Aull (2015, p. 88)は、ヘッジとブースターについて、“[H]edges are words or phrases that express caution: they qualify or soften claims by suggesting that they are not necessarily proven or true in every case. Boosters do the opposite: they allow little room for doubt by expressing certainty.”のように定義している。ヘッジは、書き手の主張を和らげるために用いられるのに対して、ブースターは、書き手の確信度の高さを表すのに用いられる。このように、ヘッジとブースターは、主張に対する書き手の態度を表すために重要な役割をもつが、これらの習得は、英語学習者にとっては難しいとされる(Aull, 2015, p. 89; Hyland, 2005, p. 133)。

本稿では、ヘッジとブースターの言語表現の一つである副詞に焦点を絞る。副詞の中でも、ヘッジは、*perhaps*や*probably*などが、ブースターは、*certainly*や*definitely*などがよく例に挙げられる。一方、頻度を表す副詞である*sometimes*、*usually*、*always*などは、語用論的な観点から扱われることは多いが、教育英文法において、これらの副詞の断言を避けるための用法が明示されることは、あまりないのではないだろうか。この用法について、明確な記述のある学習者用英文法書や教育英文法のための参考図書は、英語圏の出版社から出版されている主要なものを見る限り、Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 530)を除いて数が少ない。同書の

記述は、第2章で詳しく見るが、その前版である Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) ではなく、改訂時に新たに取り入れられた。

Halliday & Matthiessen (2014, p. 177) は、“degrees of probability” と “degrees of usuality” がモダリティ¹ と関係することを述べ、前者の例として、*possibly*、*probably*、*certainly*、後者の例として、*sometimes*、*usually*、*always* を挙げている。“Degrees of probability” と “degrees of usuality” の違いは、Halliday & Matthiessen (2014, p. 177) によると、“The former are equivalent to ‘either yes or no’, i.e. maybe yes, maybe no, with different degrees of likelihood attached. The latter are equivalent to ‘both yes and no’, i.e. sometimes yes, sometimes no, with different degrees of oftenness attached.” である。頻度を表す副詞のモダリティ表現としての役割を学習者に指導することは、学習者が物事に対する態度を効果的に表現するために、有益ではないだろうか。

日本人英語学習者は、アカデミックライティングにおいて、頻度を表す副詞をどの程度、用いているのだろうか。本稿では、Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 528) の挙げる頻度を表す副詞のうち、頻度の段階性をもつ4つの副詞、*sometimes*、*often*、*usually*、*always* について、英語母語話者の学術的文章コーパスと日本人英語学習者のアカデミックライティングコーパスを用いて、英語母語話者と日本人英語学習者のこれらの副詞の使用を比較、分析する。このことにより、日本人英語学習者のこれらの副詞の使用頻度を見るときにも、アカデミックライティングにおけるこれらの副詞の指導のための示唆を得ることを目的とする。

¹ Halliday & Matthiessen (2014, p. 172) は、モダリティ (“modality”) を “the speaker’s judgement, or request of the judgement of the listener, on the status of what is being said” のように説明している。

2. まず、副詞の意味分類について、コーパス基盤型研究に基づくBiber et al. (1999)と教育英文法の観点からの英文法書であるLarsen-Freeman & Celce-Murcia (2016)を見てみよう。²

Biber et al. (1999, p. 763)は、副詞の意味をcircumstance adverbials、stance adverbials、linking adverbialsの大きく3つに分類している。Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, pp. 509-510)も、Biber et al. (1999)などの先行研究を参照しながら、circumstance adverbials、stance adverbials、logical connectorsの3つの意味カテゴリーを設定している。Biber et al. (1999)とLarsen-Freeman & Celce-Murcia (2016)のいずれにおいても、頻度を表す副詞は、circumstance adverbialsに含まれている。しかしながら、両書とも、頻度を表す副詞が、stance adverbialsに関係することに言及している。Stance adverbialsとは、Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 510)には、“one [a major category of adverbials] which deals with the attitudes of speakers and writers toward their content”とあるように、話し手、書き手の態度を表す副詞であり、例えば、“degrees of probability” (e.g., *no doubt, evidently*)などを表す副詞が含まれる。

Biber et al. (1999, p. 801)は、*often*や*usually*などについて、これらの副詞が、会話などの言語使用域(レジスター)よりも学術的文章で用いられる頻度が高いことから、1)-2)のような学術的文章からの例を挙げ、“These adverbs contribute to academic authors’ ability to make clear the generalizability of their statements, and their meaning is thus related to that of stance adverbials.”と述べている。

² 用語について、Biber et al. (1999, p. 538)は、“In a clause, adverbs can either be integrated into an element of the clause or function themselves as an element of the clause.”と述べており、“adverbs”には、“modifiers”と“adverbials”が含まれる。一方、Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 509)は、“adverbials, including single-word adverbs (*carefully, often*), phrases (*before lunch, at last*), and clauses (*when she had finished, if we still have time*)”と記述しているように、“adverbials”は、“single-word adverbs”、“phrases”、“clauses”を含む。本稿では、両書の定義する“adverbs”と“adverbials”の両方を副詞と呼ぶ。

- 1) The condition behind the deviation is *often* rectifiable by counselling or phychotherapy.
- 2) Doing theoretical physics is *usually* a two-step process.

Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 530)も、Biber et al. (1999)のコーパス分析結果や、独自の調査に基づいて、*often*や*usually*などの頻度を表す副詞が、会話よりも、あらたまった書き言葉でよく用いられることは、“the need for writers to ‘hedge’ or qualify statements so as not to overgeneralize”を示しており、主張を和らげるために用いられる副詞*perhaps*、*probably*、*maybe*などの使用と関係していることを述べている。

このように、コーパス分析に基づく大型英文法書Biber et al. (1999)や、教育英文法の立場をとるLarsen-Freeman & Celce-Murcia (2016)は、circumstance adverbialsに分類される頻度を表す副詞が、書き手の態度を表すstance adverbialsのような働きをもつことを説明している。

Hyland (2005, pp. 129-130)は、ヘッジとブースターの働きをする言語表現を挙げている。それらのうち、副詞は、ヘッジには、“frequency adverbs (make statements indefinite)”として、*usually*、*sometimes*が、ブースターには、“amplifying adverbs (strengthen verbs and adverbs)”として、*always*が例示されている。Hyland (2005, pp.221-224)はまた、ヘッジとブースターのリストを掲載しており、*often*は、ヘッジのリストに含まれている。このリストが、*always*をブースターとしてのみ掲載していることに対して、Aull (2015, pp. 90-91)は、*not always*のように、*always*の否定形は、ブースターというよりもむしろ、ヘッジとしての機能を果たすことを指摘している。Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 528)は、頻度を表す副詞のうち、*always*の否定形*not always*は、*sometimes*や*occasionally*を意味するとして、3)は、4)、5)を含意するとしている。

- 3) Jack is *not always* on time.
- 4) Jack is *sometimes* not on time.

5) Jack is *sometimes* late.

3. 本稿で用いるコーパスは、英語母語話者コーパスは、American English 2006 (AmE06)とBritish English 2006 (BE06)、学習者コーパスは、the Longman Learners' Corpus (LLC)である。³ AmE06とBE06は、それぞれ、アメリカ英語母語話者とイギリス英語母語話者の書き言葉コーパスである。本研究では、両コーパス中の学術的文章(Learned)のサブコーパス (AmE06は、185,506語 [AmE06_L]、BE06は、182,121語 [BE06_L]) を用いる。一方、LLCは、世界中から集められた英語学習者のエッセーや、試験答案からの書き言葉コーパスである。本稿では、Country of data collectionを日本、Native language categoryを日本語、Task typeをset/free/project essays、Target variety of EnglishをAmerican Englishに設定し、アメリカ英語を用いた日本人英語学習者のデータのうち、5つの英語習熟度レベル (Elementary [31,767語]、Pre-intermediate [150,075語]、Intermediate [125,220語]、Upper intermediate [392,736語]、Advanced [36,355語]のサブコーパス (LLC_JE_AmE)を用いる(736,153語)。

4. 頻度を表す4つの副詞、*sometimes*、*often*、*usually*、*always*について、英語母語話者コーパスと日本人英語学習者コーパスにおける頻度を比較してみよう。*Always*は、第2章で述べたAull (2015)とLarsen-Freeman & Celce-Murcia (2016)に基づき、文中で、*not always*のように、否定辞とともに用いられている件数は、カウントしない。比較するコーパス間で、副詞の使用頻度に有意差があるかどうか調べるために、log-likelihood testを用いて検定を行う。

まず、英語母語話者コーパスのAmE06_LとBE06_Lにおけるこれら4つの副詞の頻度を比較する。英語母語話者の使用に関しては、Biber et al. (1999)のコーパス分析結果も参照する。Biber et al. (1999)は、40,025,700語の話し言葉と書き言葉から

³ CQPweb at Lancaster. Available at <https://cqpweb.lancs.ac.uk/>.

なる the Longman Spoken and Written English Corpus を用いているため、AmE06_L と BE06_L では分からない話し言葉と書き言葉における4つの副詞の頻度の比較を見ることができる。次に、日本人英語学習者コーパス(LLC_JE_AmE)とAmE06_Lの検索結果を比較する。さらに、LLC_JE_AmEの英語習熟度レベル別の4つの副詞の使用頻度も見る。

Table 1は、英語母語話者コーパスAmE06_LとBrE06_Lの4つの副詞の実頻度、1万語あたりの調整頻度、検定結果を表している。Alwaysが否定辞とともに用いられている件数は、AmE06_Lが7件、BE06_Lが5件であるが、これらの件数は、上で述べたように、表中には含まれていない。

Table 1 AmE06_L vs BE06_L

()内は、1万語あたりの調整頻度

	AmE06_L (185,506語)	BE06_L (182,121語)	LL	<i>p</i> -value
<i>sometimes</i>	22 (1.19)	12 (0.66)	2.80	
<i>often</i>	116 (6.25)	86 (4.72)	3.94	< 0.05
<i>usually</i>	23 (1.24)	23 (1.26)	0.00	
<i>always</i>	38 (2.05)	21 (1.15)	4.66	< 0.05
Total	199 (10.73)	142 (7.80)	8.55	< 0.01

LL=log-likelihood values。

両コーパスの調整頻度を比較してみよう。*Sometimes*の頻度は、AmE06_Lのほうが、BrE06_Lよりも高いが、有意差はない。*Often*と*always*の頻度は、いずれもAmE06_Lのほうが、BrE06_Lよりも有意に高い($p < 0.05$)。一方、*usually*の頻度は、AmE06_LよりもBE06_Lのほうが高いが、有意差はない。AmE06_LとBrE06_Lの比較では、これら4つの副詞は、*usually*を除いて、AmE06_Lのほうが、頻度が高く、4つの副詞の総件数を比較してみると、AmE06_Lのほうが、BrE06_Lよりも

有意に多く用いている($p < 0.01$)。4つの副詞の使用頻度の順を見ると、AmE06_Lでは、第1位は、*often*、第2位、*always*、第3位、*usually*、第4位、*sometimes*であり、BE06_Lは、第1位、*often*、第2位、*usually*、第3位、*always*、第4位、*sometimes*である。両方のコーパスにおいて、第1位は、*often*であり、第1位と第2位以下との頻度の差が大きい。いずれのコーパスにおいても、第4位は、*sometimes*であるが、第2位と第3位の*always*と*usually*の順位が異なる。

Table 2は、Biber et al. (1999, pp. 796-797)の分析結果に基づいて作成したものである。ここでは、adverbialとして用いられた4つの副詞の100万語あたりの頻度が、100件以下と200件単位の件数で表されている。会話(CONV)のデータは、アメリカ英語とイギリス英語における頻度が、別々に提示されているため、両者の比較をすることができる、学術的文章(ACAD)のデータは、アメリカ英語とイギリス英語の両方を合わせた件数である。

Table 2 *Sometimes, often, usually, always*の100万語あたりの出現件数

	AmE CONV	BrE CONV	ACAD
<i>sometimes</i>	200	200	200
<i>often</i>	less than 100	less than 100	600
<i>usually</i>	200	200	400
<i>always</i>	600	600	200

Biber et al. (1999, pp. 796-797)に基づいて作成。

4つの副詞は、会話ではアメリカ英語とイギリス英語で出現件数に差はない。しかし、会話と学術的文章を比較すると、*sometimes*を除く3つの副詞の頻度差は、明らかである。*Sometimes*の頻度は、会話と学術的文章のいずれも100万語あたり200件である。*Often*と*usually*は、会話よりも学術的文章において頻度が高く、*often*は、会話で100件以下であるのに対して、学術的文章では、600件であり、両者の頻度差が大きい。一方、*always*は、会話では600件であるが、学術的文章では200件で

あり、会話においてかなり頻度が高い。これらのことから、会話や学術的文章といったレジスターにおけるこれらの副詞の頻度の違いが分かる。*Always*の頻度が、会話よりも学術的文章において低いことは、Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, pp. 529-530)も述べているように、学術的文章などのフォーマルな書き言葉では、書き手が断定的な主張を避けることと関係があると言えよう。

Biber et al. (1999)の学術的文章における4つの副詞の頻度の順位は、第1位、*often*、第2位、*usually*であり、*sometimes*と*always*が同件数で、第3位である。4つの副詞の中で、*often*の頻度が最も高いことは、AmE06_LとBE06_Lの検索結果と同様である。

日本人英語学習者のこれらの副詞の使用頻度を見てみよう。Table 3は、4つの副詞の実頻度、1万語あたりの調整頻度、検定結果を表している。Table 4は、LLC_JE_AmEの英語習熟度レベル別に4つの副詞の実頻度と1万語あたりの調整頻度を表している。いずれの表にも、LLC_JE_AmEの*always*が否定辞と共起する56件数は、含まれていない。

Table 3 LLC_JE_AmE vs AmE06_L

()内は、1万語あたりの調整頻度

	LLC_JE_AmE (736,153語)	AmE06_L (185,506語)	LL	<i>p</i> -value
<i>sometimes</i>	319 (4.33)	22 (1.19)	50.77	< 0.0001
<i>often</i>	283 (3.84)	116 (6.25)	-18.08	< 0.0001
<i>usually</i>	179 (2.43)	23 (1.24)	10.97	< 0.001
<i>always</i>	510 (6.93)	38 (2.05)	74.94	< 0.0001
Total	1291 (17.54)	199 (10.73)	46.88	< 0.0001

LL=log-likelihood values。LLの-の値は、AmE06_Lよりも、LLC_JE_AmEにおいて、副詞の頻度が低いことを表す。

Table 4 LLC_JE_AmE 英語習熟度レベル別頻度

()内は、1万語あたりの調整頻度

	Elementary (31,767 語)	Pre- intermediate (150,075 語)	Intermediate (125,220 語)	Upper intermediate (392,736 語)	Advanced (36,355 語)
<i>sometimes</i>	4 (1.26)	56 (3.73)	85 (6.79)	152 (3.87)	22 (6.05)
<i>often</i>	8 (2.52)	55 (3.66)	46 (3.67)	143 (3.64)	31 (8.53)
<i>usually</i>	6 (1.89)	28 (1.87)	26 (2.08)	93 (2.37)	26 (7.15)
<i>always</i>	11 (3.46)	85 (5.66)	165 (13.18)	222 (5.65)	27 (7.43)
Total	29 (9.13)	224 (14.93)	322 (25.71)	610 (15.53)	106 (29.16)

Table 3を見ながら、LLC_JE_AmEとAmE06_Lの4つの副詞の頻度を比較してみよう。注目すべきは、4つのすべての副詞の使用頻度と総件数に、両コーパス間で有意差があることである。総件数は、AmE06_LよりもLLC_JE_AmEのほうが、有意に高い($p < 0.0001$)。3つの副詞*sometimes*、*usually*、*always*の頻度は、AmE06_LよりもLLC_JE_AmEのほうが有意に高い(*sometimes*と*always*は、 $p < 0.0001$ 、*usually*は、 $p < 0.001$)。しかしながら、*often*の頻度は、LLC_JE_AmEのほうがAmE06_Lよりも有意に低い($p < 0.0001$)。これら4つの副詞の使用頻度の順を見ると、LLC_JE_AmEでは、第1位は、*always*、第2位、*sometimes*、第3位、*often*、第4位、*usually*である。Tables1-2で見たように、AmE06_L、BE06_L、Biber et al. (1999)の学術的文章のサブコーパスでは、いずれも4つの副詞のうち、*often*が第1位であるが、LLC_JE_AmEでは、第3位である。

ここで、注意すべきは、LLC_JE_AmEにおけるトピック、あるいは提示文の学習者の副詞の使用への影響である。LLC_JE_AmEの4つの副詞の用例を見ると、*always*に関しては、Intermediateレベルにおいて、トピック、あるいは提示文の中に*always*が使われ、その英語を学習者がそのまま、あるいは若干の単語を変えて用いていると思われるものがある。学習者の英文に繰り返される英語表現から、トピック、あるいは提示文には、“people should *always* follow their dream(s)”、“employees

should *always* obey company rules”、 “if children *always* stay at home with their parents” のような英文が含まれていると考えられる。LLCで収集されている英文のトピックや提示文は、コーパスデータ情報に含まれておらず、確認できないため、明確なことは言えないが、少なくとも、上記の英文中の英語表現を用いている *always* の用例は、80件ある。Table 4のIntermediateレベルの *always* の総件数は、165件であるが、そのうち、およそ50%のものが、トピック、あるいは提示文の影響を受けていると考えられる。Table 3のLLC_JE_AmEのデータから、Table 4のIntermediateレベルの *always* の件数(165件)と総語数(125,220語)を差し引いて、AmE06_Lの *always* の件数と比較してみた結果、やはり、日本人英語学習者のほうが、英語母語話者よりも、この副詞を有意に高い頻度で用いており ($p < 0.0001$)、日本人英語学習者の *always* の使用頻度の高さが分かる。

4つの副詞は、*sometimes*、*often*、*usually*、*always*の順に、高い頻度を表す(Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016, p. 528)。Table 2が表すBiber et al. (1999, pp. 796-797)の分析結果から、4つの副詞のうち、プースターの働きをする *always* の頻度は、アメリカ英語とイギリス英語ともに、会話で最も高く、学術的文章において、*sometimes*とともに第3位である。⁴ さらに、同書では、4つの副詞のうち、学術的文章では、第1位は、*often*、第2位は、*usually*である。本稿のコーパス検索結果、AmE06_Lでは、Biber et al. (1999)と同じく、第1位は、*often*であるが、第2位は、*always*、第3位、*usually*であり、Biber et al. (1999, pp. 796-797)の結果と異なる。BE06_Lは、第1位、第2位の順は、Biber et al. (1999)と同じである。LLC_JE_AmEでは、*often*と*usually*は、それぞれ第3位と第4位である。LLC_JE_AmEでは、プースターである *always* の使用頻度が高く、英語母語話者が学術的文章で用いる頻度が高い *often* の使用順位が低いことから、日本人英語学習者のアカデミックライティングにおけるこれら4つの副詞の使用は、英語母語話者の使用と異なる。つまり、日本人英語学習者は、アカデミックライティングにおける言語使用が十分に習得でき

⁴ Biber et al. (1999, pp. 796-797)の *always* の件数には、*not always* のように、この副詞と否定辞が共起した場合も含まれると考えられる。

ておらず、アカデミックライティングで、話し言葉を用いる特徴をもつことがうかがえる。

Table 4のLLC_JE_AmEにおける4つの副詞の1万語あたりの調整頻度を見ながら、5つの英語習熟度レベル別の使用頻度を見てみよう。学習者レベルの後ろに調整頻度を付す。*Sometimes*は、Intermediate (6.79)で最も頻度が高いが、Elementary (1.26)、Pre-intermediate (3.73)、Upper intermediate (3.87)、Advanced (6.05)とレベルが上がるにつれて、使用頻度が上がっている。*Often*は、Elementary (2.52)、Pre-intermediate (3.66)、Intermediate (3.67)までレベルが高くなるほど頻度が上がり、Upper-intermediate (3.64)は、Pre-intermediate とIntermediate よりも若干頻度が低いが、Advanced (8.53)において最も頻度が高い。*Usually*は、Elementary (1.89)とPre-intermediate (1.87)のいずれも1万語あたり2件に満たないが、Intermediate (2.08)とUpper intermediate (2.37)で、1万語あたり2件を超え、Advanced (7.15)は、最も頻度が高く、他の4レベルとの頻度差が大きい。*Always*は、Intermediate (13.18)において、他のレベルよりも頻度が高いが、すでに述べたように、トピック、あるいは提示文の英語の影響を大きく受けていると考えられることに注意しなければならない。*Always*は、Elementary (3.46)、Pre-intermediate (5.66)、Intermediate (13.18)とレベルが高いほど頻度が高く、Upper-intermediate (5.65)は、Pre-intermediate (5.66)と同様に、1万語あたり6件に満たないが、Advanced (7.43)は、Intermediate (13.18)以外の3つのレベルよりも頻度が高い。

4つの副詞の総件数を下位2レベルと上位3レベルの2つのグループに分けて比較してみると、下位グループよりも上位グループのほうが、これらの副詞を有意に多く使用している($p < 0.0001$)。ただし、Intermediateにおけるトピック、あるいは提示文の影響も考慮しなければならない。

各習熟度レベルの4つの副詞の頻度の順位を見てみると、Advancedは、*often*の使用頻度が、第1位である。このことは、Advancedとその他のレベルの異なる点である。*Often*は、AdvancedとAmE06_Lの間に有意差はないが、Advancedのほうが、使用頻度が高い。5つのレベルのうち、Advancedの次に、*often*の使用頻度が高いIntermediateとAmE06_Lの比較してみると、この副詞の頻度は、Intermediateのほ

うが、AmE06_L よりも有意に低い($p < 0.01$)。Advancedは、第2位が、*always*、第3位、*usually*、第4位、*sometimes*であり、使用頻度の順は、AmE06_Lと同じであるが、AmE06_Lは、第1位の*often*と第2位の*always*以下の副詞との間に、頻度の差があるが、Advancedは、そうではない。

5. 本稿では、頻度を表す4つの副詞*sometimes*、*often*、*usually*、*always*について、英語母語話者コーパス(AmE06_L、BE06_L)と日本人英語学習者コーパス(LLC_JE_AmE)を分析し、Biber et al. (1999)のコーパス分析結果も参照しながら、日本人英語学習者のこれらの副詞の使用を調査した。LLC_JE_AmEとAmE06_Lにおける4つの副詞の総件数を比較すると、LLC_JE_AmEのほうが、AmE06_Lよりもこれらの副詞を有意に多く用いている($p < 0.0001$)。4つの副詞のうち、*sometimes*、*usually*、*always*の頻度は、LLC_JE_AmEのほうが、AmE06_Lよりも有意に高い(*sometimes*と*always*は、 $p < 0.0001$ 、*usually*は、 $p < 0.001$)。一方、*often*は、LLC_JE_AmEのほうが、有意に低い($p < 0.0001$)。ただし、LLC_JE_AmEの最も英語習熟度が高いAdvancedレベルは、母語話者と同様に、4つの副詞の中で、*often*の使用頻度が最も高く、AmE06_Lとの間に、有意差はないものの、前者のほうが、使用頻度が高い。本研究のAmE06_LとBE06_Lの調査結果とBiber et al. (1999)の先行研究結果から、4つの副詞のうち、母語話者の学術的文章で用いられる頻度が最も高いのは、*often*である。Advancedレベル以外の日本人英語学習者には、*often*の使用を奨励する必要があるだろう。LLC_JE_AmEでは、学術的文章よりも会話で用いられる頻度の高い*always*を使用する特徴がみられる。この副詞の頻度は、LLC_JE_AmEのほうが、AmE06_Lよりも有意に高い($p < 0.0001$)。Alwaysの使用に、トピック、あるいは提示文の影響が明らかに見られるIntermediateレベルを除いた検定結果からも、同様のことが言える。このことから、日本人英語学習者のアカデミックライティングに、話し言葉の使用の特徴があることが分かる。

本稿のコーパス分析結果から、日本人英語学習者のアカデミックライティングの指導において、次の2点を提案したい。一つは、断言を避けるための頻度を表す副詞の役割について、学習者の理解を促進することである。もう一つは、話し言葉と書

き言葉というレジスターによる言葉遣いの違いを認識した英語表現の提示である。

Aull (2015, p. 90)は、ヘッジやブースターが、ライティングの教科書において、十分に扱われているとは言えないことを述べている。今後、アカデミックライティングの教材の改善や、さらなる教材開発も必要であろう。アカデミックライティングに必要な言語表現、そして書き言葉と話し言葉といったレジスターによる言語使用の違いに関する記述の充実も望まれる。

Acknowledgements

この論文は、科学研究費補助金の助成を受けて行った研究成果の一部である(JSPS KAKENHI Grant Number JP19K00806)。

References

- Aull, L. (2015). *First-year university writing*. London: Palgrave Macmillan.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Celce-Murcia, M., & Larsen-Freeman, D. (1999). *The grammar book* (2nd ed.). Boston: Heinle & Heinle.
- Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M. (2014). *Halliday's introduction to functional grammar* (4th ed.). Oxford: Routledge.
- Hyland, K. (2005). *Metadiscourse*. London, New York: Continuum.
- Larsen-Freeman, D., & Celce-Murcia, M. (2016). *The grammar book* (3rd ed.). Boston: National Geographic Learning.